師範國語要說

文部省

文部省調査普及局刊行誤寄贈（第一級）

K450.8

1a

目次

第一章　序說
一　國語
二　音語
第二章　音聲
第三章　文字
第四章　語彙
第五章　文法
第六章　方言と標準語
第七章　現代文字言語の種類
第八章　國語の變遷
第九章　結語

師範國語要說

第一章　序說

一、國語

人類はすべて言語を用ひる。しかしこの言語は決して一樣なものではなく、非常に多くの種類に分れる。われわれの用ひる日本語もこの數多い言語の一つである。

世界に存する國家には、それぞれその國の代表的言語と認むべきものがある。これを國語といふ。わが國の國語は日本語である。一つの國家の領土内に二種類以上の言語の存する場合もあるが、國家の中樞をなす民族の言語が、おのづから國語としての位置を占める。わが國の中樞民族は日本民族であるから、日本民族の言語である日本語が國語と認められてゐる

國語

のである。

人類は社會生活をなす。この社會生活をなすに極めて有用なものが言語である。われわれの日々の生活が言語によつて支障なく營まれることは周知の事實であるが、また文化の蓄積、普及、向上も言語の力に負ふ所が多い。諸般の教育も主として言語を通じてなされ、文學に接して感奮興起し、豊かな情操を養ひ得るのも、言語によつてである。

言語は右のやうな重大な働きをなすものであるから、國語に對する關心を高めることは大いに肝要なことである。國語の無自覺、氣儘な使用は、國語の歴史性、社會性を無視することである。隨つてわれわれは、國語に對して常に敬虔な態度を持し、國語の正しく豊かな發達を念願としなければならない。

二、言語

言語は人類特有のもので、思想感情を發表傳達することを目的とし、音聲を材料として用ひるものである。思想感情を他に傳達する方法としては、身振、手眞似、繪畫、彫塑等各種各樣のものが存するが、中でも言語は非常に高度の發達を遂げて居り、微妙にして複雜な内容をよく表し得る。言語は音聲を用ひるものであるといつても、反射的に聲を出したり叫んだりするのは、通常言語とは考へられない。言語はある目的を達するために、有意的に發するものに限り、しかもいふまでもなく、意味を伴なふものでなければならない。即ち一定の音聲に一定の思想が結び附いて、その音聲が思想を表す記號となり、その音聲を聞けばその思想を思ひ浮べ、その思想が浮ぶとその音聲を發し得るといふやうになつてはじめて、言語は成り立つのである。

音聲・意味

その音聲と思想とは聯想によつて結合するのであつて、如何なる音聲に如何なる思想を配するかは、社會的習慣としてきまつて居り、社會の異なるに從つて異なる。この音聲と、音聲によつて表される思想、即ち言語の意味との二つは、言語たる以上は必ずなくてはならないもので、音聲と意味は言語を形づくる二つの要素である。

言語が實際に行はれるには、話手と聞手とが必要である。さうして、この

話手と聞手とでは、互に違つた二つのはたらきが行はれる。話手は、思想感情を人に傳へるために口を動かして現實に音聲を發し、聞手の方では、その音聲を聞いて、それが表現する話手の思想感情を理會する。即ち前者は、自己の傳へようとすることを言語に代表せしめて外に表すのであるから、發表作用（又は表現）であり、後者は、話手の傳へようとすることを、受け入れて知るのであるから、理會作用（又は解釋）である。

かやうに話手の發表作用と、聞手の理會作用とによつて、思想の傳達が出來、言語がその用を全うするのであるが、しかし話手の傳へようとする所のものを、聞手が正しく認らず理會し得るのは、話手も聞手も、周圍の人から、これまで幾度となくその音聲を聞き、且つそれには、いつも一定の意味が伴なつてゐることを經驗して、その音聲の記憶と、その意味、即ちその音聲の指し示してゐる事物の記憶とが相伴なつて心の中に存してゐるからである。なほ、この言語の理會には、前後の事情や周圍の情景がこれを大いに助けるものであることを忘れてはならない。

音聲は聽覺に訴へるものである。特殊の機械の助けを借りるのでなければ、通常その場で消え去り、永く保存することは出來ず、その音聲の達し得る範圍にしても限度がある。即ち音聲を以てしては、時間的に又空間的に相當の制限を受ける。かかる音聲の有する缺點を補ふものとして用ひられるのが文字である。文字は、元來繪などのやうな視覺的記號として、言語とは無關係に、思想傳達の一要具として發生したものに基づくものであつて、後に言語と結び附くに至り、言語の音聲意味を一定の文字によつて表すやうになつた。換言すれば、單なる視覺的記號に過ぎなかつたものが、今度は讀むことが出來るやうになつたのである。さうしてこの讀むことが出來るといふ一事こそ、文字をして他の視覺的記號と區別せしめる重要な特性なのである。かくして一定の文字を見れば、直ちにそれに對する言語の音聲及び意味を思ひ浮べるのである。

文字による言語を文字言語といひ、これに對して、專ら音聲による言語を音聲言語といふ。

文字

一　文字言語　音聲言語

文字言語に於いては、その發表作用は、具體的に文字に書くといふ作用として行はれ、その理會作用は、文字を讀むといふ作用として行はれる。この際、實際に口を動かして音聲を發すれば音讀となり、然らざれば默讀となる。さうして音聲言語に於いては、特殊の機械を用ひない限りは、この發表作用と理會作用が同時に行はれなければならないのに反して、文字言語の場合は、發表作用が行はれてから、多くの時間を隔てた後でも、理會作用が行はれ得る。

言語が思想感情を互に通じ合ふ目的のために生れ、且つ用ひられるものであることは上述の通りであるが、しかし言語の用は、單なる思想感情交換の要具に止まるものではない。はじめ模糊とした思想感情も、適當な言語表現を得ることによつて明確な姿を呈して來ることや、思考感動を音聲や文字で表現することによつて、自らの思考感動の不備を悟り、又は自らの思考感動の一層の進展を見ることは、しばしば經驗するところである。思考感動と言語とは切つても切れない密接な關係がある。從つて、言語を異にする民族がその思考感動の形式を異にするのは當然である。

三、國語の構造

言語はこれを外面から觀察してみると音聲の連續である。しかし、それはどこまでも連續するのではなく、ところどころ句切つて發音されるのが普通である。國語について見るに、櫻がちらほら咲きました」といふ言葉は、これを實際に發音した場合には、マシタの次で音聲の切れるのが普通であるが、サクラガで一旦切つて、チラホラサキマシタと續けることも出來、又チラホラで切ることも出來る。即ち、この言葉を實際に發音して出來るだけ短く句切つてみると、サクラガ—チラホラ—サキマシタと三つになる。しかし、これ以上句切つて發音することはない。さうして、このサクラガとか、チラホラとか、サキマシタとかいふものは、ある一定の意味を持つてゐるのであるが、更にこれをその意味には關係なく、音聲としてのみ觀て、通常の常識に從つて、實際の發音上出來る限り短く句切つて發音してみると、サ、ク、

ラ、ガ、チ、ラ、ホ、ラ、サ、キ、マ、シ、タ、と十三に分つことが出來る。このやうな音聲の一節を音節といふ。卽ち國語の音聲は音節より成り立つてゐるのである。さうして國語に用ひられる互に違つた音節は、決して無數にあるわけではなく、一定の數に限られてゐる。

音節

次に、いろいろの違つた音節を互に比較してみると、例へば、「カ」(ka)と、「サ」(sa)「タ」(ta)のやうに、そのどこかの部分に共通する所があつて、その異同に從つて更にいくつかに分けることの出來るものがある。それを出來るだけ細かく分けたその一つ一つを、單音と稱する。卽ち、音節はいくづかの單音から構成される。中にはどうしても分解出來ない音節もあるが、その場合はただ一つの單音で出來てゐるものである。さうして國語に於いて用ひられる單音の數には限りがある。この一定の言語に用ひられるあらゆる單音を集めて組織立てたものを音聲組織といふ。なほ單音から音節を構成する方法にもあるきまりがある。

單音

音聲組織

次に、言語を、意味に從つて分解してその構造を考へてみるに、實際に言語、

文

によつてある思想を言ひ表さうとする場合簡單に言ひ終るものもあるが、長く續くこともある。講演の場合の如きは非常に長く續く。しかし、この場合、始めから終りまで一息に發音されるといふことはなく、ところどころ切つて、息つぎをしながら續けられるのが普通である。この切れ目は、通常は意味の切れ目と一致してゐる。この切れ目の中、場合によつては切つてもよく、切らずに續けてよい所もあるが、中に常に切れ目をつけて發音しなければならない所がある。例へば、「東京は日ましに溫くなつて來ます樣がちらほら咲き始めました」といふ言葉では、マスの次と、マシタの次とでは、切れ目をつけるのが常である。この切れ目は、ある事柄を言ひ終つた所である。このやうにある纏つた思想を言ひ終つた所では、必ず音聲が切れるのであつて、その切れ目までの一續きの言葉を文といふ。卽ち文は、內容からいへばある纏つた思想を表すものであり、外形からいへばいつもその終りに音の斷止があるものである。多くの文は、更に中間でこれを切ることが出來る。サタラガチラホラサキマシタの如きものにしても、この切り方に

はいろいろあるが、出來る限り多くの句切りを附けて、細かく切つてみると、サクラガ―チラホラ―サキマシタの三つとなつて、文に即して言語を考へた場合には、これ以上句切ることが出來ない。このやうな一句切りは、實に文を構成する最小單位といふべきものであるが、これに對する名稱はいろいろあつて未だ一定してゐない。ここでは假に「文節」といふ名稱に從つておく。「いいえ」「行け」などの如く、文の中には、その中間で句切ることの出來ないものがある。これらは一つの「文節」で出來てゐる文である。

文節

次にこの「文節」はこれをいくつか並べてみると、中には互に共通した部分の認められるものがある。例へば「櫻が咲きました」「櫻の花です」などの文に於ける「櫻が」「櫻の」といふ「文節」について觀ると、そこには「櫻」といふ共通した部分が認められる。又「櫻が咲きました」「山がきれいです」などの文に於ける「櫻が」「山が」といふ「文節」では「が」といふものが共通してゐる。このやうに互に共通點のある「文節」を並べてそこから抽出されるものが單語である。このやうに「文節」は單語から構成される。「文節」にはこれ以上分解出來ないものがあるが、これは「文節」が一つの單語で出來てゐる場合である。從つて「いいえ」「行け」などの文は結局一つの單語で出來てゐる文といふことが出來る。

單語

單語は一切の事物を言ひ表す基礎となるものであつて、その數が多く、その意味も外形も種種樣樣である。この單語を集めたものを語彙といふ。

語彙

（語彙を登錄したものが辭典である。）

以上の如く、文を、文に即して分解した場合の最小單位は「文節」であり、このやうな「文節」を基にして、われわれの腦裏で抽出された單位が單語である。從つて、文を構成する直接の單位は、文節であつて單語ではないけれども、單語は文を構成する場合の材料であるといへる。實際に言語を用ひてある場合つた思想を言ひ表さうとする時、多くはわれわれの腦裏に貯へられてゐる單語（これは個個の思想を表すものである）を、いくつか適當に組み立てて一つの文として發表する。一方聞手の方は、文を組み立ててゐる個個の單語を順順に聞いてその單語の表す個個の思想をたよりとし、これを綜合して、話手の傳へようとする全き思想を了解する。以上のやうなわけであるか

ら、あらゆる言語は、實際にこれを用ひる場合には、すべて文として現れるのであるが、一面から見れば、あらゆる言語は、單語であるといふことが出來る。

文は單語を材料として構成される。さうして文全體の意味は、文に用ひられたすべての單語の意味によつて定まる。しかし單語をただ集めただけでは、單語の意味が結合して一つの纏つた意味を有する文にはならない。ある一つの纏つた意味を表すやうにするためには、一定のきまりに從つて單語が排列され、結合されなければならない。この文を構成する場合のきまりが卽ち文法である。（文法を記したものが文典である。）

以上のやうに、言語の構造を、音聲と意味との二つの面から觀察してみると、音聲に關するものと、單語に關するものと、文に關するものと、この三つの部面のあることが知られる。又文字言語に於いては、このほかに文字に關するものがある。從つて言語に對して觀察をなす場合にも、これらの部面に分つて考察するのが便利である。

文法

四、國語內の言語の相違

國語と一口に唱へてゐるものが、すべて一樣であつて少しも違ひがないかといふに、決してさうではなく、現代の國語について見ても、種種の言語の相違が見られる。先づ土地による言語の違ひがある。この土地土地によつて異なる言語を方言といふ。卽ち國語には多くの方言が存する。この各地方に行はれる方言に對して、全國共通に用ひられるものとして標準語がある。又職業、階級の相違、男女、老幼の差等によつて、それぞれ特色をもつた言語が行はれてゐる。これらは概していへば、語彙の點に差異が見られるのであるが、中でも方言相互の差異は最も著しく、音聲や文法の點でも異なる所が少くない。さうしてこれらの言語は、それぞれ、或は地域的に、或は社會的に、ある限られた範圍に行はれるもので、それぞれの言語のもつ特徵は、同時にそれを話す人の屬する特殊の社會の標識となるものである。（唯標準語だけは國語の行はれる全範圍に及ぶものである。）

方言

標準語

以上擧げたものは、談話に用ひる言語、卽ち音聲言語に見られる種種の言

口語文
文語文

語であるが文字に書く場合の言語、即ち文字言語にも種種の言語がある。文字言語はこれを大別すれば、現代の標準語に基づく口語文と、文字に書く場合の言語として古くから傳はつて來た特殊の言語である文語文とがあり、更に文語文には、普通文・書簡文（候文）・漢文などがある。これらの文字言語に於ける各種の言語はそれぞれ互に相違があるのであるが、殊に口語文と文語文との間には、語彙の違ひのほかに著しい文法の違ひがある。又文字に書いた形にも相違のあるものがあり、殊に書簡文・漢文などは獨特の書き方をするのが普通である。これら現代國語の種類を表示すれば次の如くならう。

- 方言
- 音聲言語
- 標準語
- 文字言語
  - 口語文
  - 文語文

方言は地方的個別的のものであるが、標準語及び口語文・文語文は全國的一般的のものである。口語文は標準語に基づいたものであるから、口語文と標準語とを一括して口語とよび、これに對して文語文を文語といふことがある。

口語・文語

以上の如く、現代の國語に各種の言語があるが、使用する人を中心として考へてみると、同一人がこれらすべての言語に通曉してゐるといふわけではない。しかし、自分の土地の言語のほかに、標準語を語り、口語文や文語文を讀み、書簡文を書くといふ風に、數種の言語に通じてゐるのが普通である。但し、自分の土地の言語は、知らず識らずの中に覺えてしまふものであるが、その他は意識的に學んではじめて知ることの出來るものであり、多くは學校教育によつて與へられるものである。

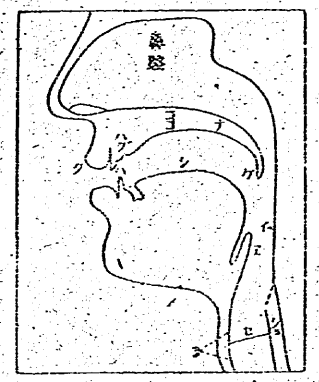
なほ國語には、時代時代による相違がある。例へば、古事記や萬葉集の言語、源氏物語や枕草子の言語、保元・平治・平家物語の言語、謠曲や狂言の言語、淨瑠璃や歌舞伎脚本の言語などを較べてみるならば、そこには互に少からぬ差異があつて、時代によつて如何に言語が變化するかが分るであらう。

このやうに同じ國語でもその中に種種の相違があるのであるが、この種種の言語を全然別のものとは考へずに、いづれも國語であると考へてゐる。それは、これらの言語が、日本人の用ひるものであるといふやうな常識的判斷のみに基づくものではなく、その根柢には嚴然たる言語上の事實が横はつてゐるからである。即ち、これらの種種の言語は、互に違つた點が少くないにしても、大體に於いて、一致や類似が多く、根本に於いて共通した性格を有するものであることは疑ひないものであつて、畢竟その差異は根本的なものではなく、同種のものの變異であり、同一のものの變形であると見るべきものなのである。

第二章　音聲

一、發音器官の構造並びに作用

音聲が、音聲を外形とし、意味を內容とするものであることは、前に述べた通りであるが、音聲は、話をする側からいへば、人間の發音器官によつてとられられるものであり、これを聽く方からいへば、聽音器官によつてとらへられるものである。



聽音器官はその裝置に對して特別に說明することを要しないが、發音器官の方は少しく說明を加へる必要がある。

言語に用ひられる音聲は、呼氣を利用するものでその

氣流にいろいろの變化を與へて諸種の音を發するのである。發音する際に用ひる諸器官の中、主なものを次に擧げる。

喉頭

（イ）喉頭　喉頭は氣管の最上端にあつて、特別の一區劃をなしてゐる小さな室のやうなものである。さうしてこの喉頭の室の中には、

聲帶

左右の壁から張り出した一對の襞のやうなものがある。これが聲帶である。聲帶は主に筋肉から成り立つてゐて、軟く、樣樣に動く。左右から張り出した襞の間に、隙間を作ることも出來るし、密着させることも出來る。（聲帶の作る隙間を聲門といふ。）この聲帶は、吐き出す息によつてそのへりが振動を起し、その振動によつて空氣に疎密の波動を作り、一種の音を出す。（この場合の聲帶の狀態を發聲聲門といふ。）この音は所謂樂音に屬するもので、これを「こゑ」といふ。「こゑ」は聲帶の張り方や息の出し方の强弱によつていろいろに變化する。聲帶を緊張させた場合は、調子の高い音が出、ゆるめた場合は、低い音が出る。又息の出し方が强ければ、高くて强い音が出、出し方が弱ければ、低くて弱い音が出る。又聲帶が長ければ低く、短ければ高い。

次に聲帶の間の隙間を小さくして（この場合のを氣音聲門といふ）呼氣を通すと、一種のこすれた音が出る。これを氣音又は聲門音といふ。なほ喉頭全體は、一種の共鳴室の役目をもする。

喉頭

（ロ）喉頭　喉頭の上部に咽頭がある。咽頭の下部は、喉頭を通して氣管・氣管支・肺に通ずる道と、食道から胃に通ずる道とに分れる。又上の方は、一方は鼻腔に通じ、一方は口腔に通ずる。口へ入れた食物が、氣管へ行かずに食道へ行くやうにするため、舌のつけ根の奥の方に、自由に動くことの出來る會厭といふものがある。この會厭は、又「こゑ」に一種の響を與へる役目もする。なほ咽頭全體は、一種の共鳴室のはたらきをする。

口腔

（ハ）口腔　咽頭から外部へ通ずる一つの通路が口腔である。この口腔はそれ全體が共鳴室の役目をするほか、この中には發音器官として重要な役目をするものがたくさんある。即ち、唇・齒・齦・顎・舌等である。これらの中、唇・齒・齦等については特別の解說を必要としないが、顎は上顎と下顎とより成り、動くのは下顎の方で、これによつて口をあけたてする。上顎の內部は

大體丸天井の形をなしてゐる。これを口蓋といふ。口蓋の中くちもとに近い半分は、內部に骨があつて堅い。これを硬口蓋と名づける。奥に近い半分は內部に骨がなくて柔い。この部分を軟口蓋といふ。軟口蓋の末端には肉片が垂れ下がつてゐる。これを懸雍垂（のどひこ）といふ。懸雍垂は一種のふるへ聲を出すのに用ひられる（但し國語では用ひない）。舌は發音上最も重要なものであるが、柔軟であつてよく動き、從つてその形も種種樣樣に變る。發音を說明する必要上、舌の表面をいくつかに區分する。奥の方即ち軟口蓋に向ひ合つてゐる部分を後舌面、前の方即ち硬口蓋に對する部分を前舌面、中央を中舌面と名づける。又前舌面の中、舌の突端を特に舌尖といふこともある。

硬口蓋
軟口蓋
後舌面
前舌面
中舌面

鼻腔　（三）鼻腔　これも喉頭から外部に通ずる一つの通路であるが、前に述べた軟口蓋と懸雍垂とは、これを奥へ引込めると少し持ち上つて喉頭の後の壁に密着し、鼻腔への通路をふさいでしまふ。從つて肺から出た空氣は、鼻腔へ行かずに口腔へ流れる。普通の發音はこの狀態で發せられるのである。このやうに鼻腔は主として共鳴室の役目をする。

以上の如き諸器官が働いて音を發するのであるが、「こゑ」を用ひるか否かで、有聲音と無聲音とに分れる。この有聲音又は無聲音が、唇・齒・舌等によつて變化を受けて、種種の音となつて現れるのである。この各種の音を作ることを調音といひ、音を作る場所を調音位置といふ。

有聲音
無聲音
調音位置

二、單音の種類

言語に用ひる音聲の最小單位は單音である。單音は母音と子音とにわかれる。母音は有聲音であるが、子音には有聲音（有聲子音）と無聲音（無聲子音）とがある。

母音
子音

（イ）母音　母音は聲帶を振動させて生じた「こゑ」が、口腔內の諸器官によつて、何らさへぎられることなくして發せられたものである。さうして口腔內の形及び大きさによつていろいろの種類が出來る。この形及び大き

さは、主として口の開け方と舌の動き方によつて作られる。殊に母音の調音に最も決定的なはたらきをするのは、舌の位置であるから、母音の種類を次の如く大別することが出來る。

一、前舌母音　硬口蓋と前舌とが接近する。（稱餘では接觸する）

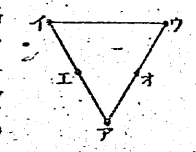
二、後舌母音　軟口蓋と後舌とが接近する。（同）

三、中舌母音　軟口蓋の前部と中舌とが接近する。（同）

母音には、特に唇をまるめて發音するものがある。又母音を長く發音した場合、これを長母音といひ、二つの母音が重なつて互に密接に結び附いてゐる場合、これを重母音といふ。又母音を發する時は、軟口蓋が持ち上つて喉頭の後壁に附着し、鼻への通路をふさいでゐるのが常であるが、もしふさぎ方が不十分であると、鼻ごゑの母音が出來る。これを鼻母音といふ。

現代國語の標準的母音は、アイウエオの五つである。イエは前舌母音、ウオは後舌母音である。アは口を大きく開き、舌は大體平らである。これを[a]で示す。イは前舌面が硬口蓋に向つて高まり、口の開き方は小さい。

子音



これを[i]で示す。ウはイと同樣口の開き方は小さいが、後舌面が高まる。[u]を以て示す。但し、[u]は國語に見られるやうな唇をまるめて出す音を表すのに用ひられるため、自然の唇の位置で發音される國語のウは、[ɯ]を以て示すことがある。エはイとアとの中間音で[e]、オはアとウとの中間音で[o]で表す。これら母音相互の關係は上の如き圖式で示すことが出來る。なほ地方によつては、エとアの中間の音、オとアの中間の音、曖昧なイ・ウ或は鼻母音等の用ひられることがある。

（ロ）子音　子音は、呼氣が發音器官のいろいろの部分でさへぎられて生ずるものである。そのさへぎり方は、氣流の通路をせばめるか又は全く閉ぢるかであるが、これらの場合、呼氣の流れ方によつて子音を次の如く分けることが出來る。

破裂音　閉鎖によつて一旦とめられた氣流が、閉鎖を破つて急に出る時發せられる音。

摩擦音　著しいせばまりを、氣流が無理に通過する時に發せられる音。

破擦音　同じ調音位置に於いて、破裂と摩擦とが密接に相ついで行はれて發せられる音。

以上は、すべて氣流を專ら口より出すものであつて、いはば口音であるが、これに對して口腔内のどこかの部分で氣流をさへぎつて、これを口から出さずに鼻から出す場合がある。これを鼻音といふ。

又どこで呼氣がさへぎられるかによつて、卽ち調音位置によつて次の如く分けることも出來る。

兩唇音　上下の唇でさへぎられる。

齒　音　舌の前部と上齒又は上の齦とで。

硬口蓋音　硬口蓋と前舌面とで。

軟口蓋音　軟口蓋と後舌面とで。

聲門音　聲帶で。

現代國語に用ひられる標準的子音を、以上の二種の分類を經緯として表示すると、次の通りである。

		鼻音		口音							
		無聲	有聲	破裂音		摩擦音		破擦音			
				無聲	有聲	無聲	有聲	無聲	有聲		
兩唇音			m	p	b	(F)	w				
齒音			n	t r	d	s ʃ	z ʒ	ts tʃ	dz dʒ		
硬口蓋音						(ç)	j				
軟口蓋音			ŋ N	k	g						
聲門音						h					

注意――括弧で囲んだのは特殊の場合に現れるものである。

[m]マ行の子音として現れる。又アンマ(按摩)デンパ(電波)サンパ(三羽)等に於けるンもこの音である。又「うま」(馬)「うめ」(梅)の「う」に當るンも[m]で

ある。

[p] パ行の子音として現れる。

[b] バ行の子音として現れる。

[F] フカイ(深い)フタツ(二つ)等の語に於いて、フの子音がこの音で發音されることがある。

[w] ワの子音として現れる。

[n] ナ行の子音として現れる。又コンナン(困難)デントウ(電燈)サンダイ(三臺)等に於けるンもこの音である。

[t] タ、テ、トの子音として現れる。

[d] ダ、デ、ドの子音として現れる。

[s] サ、ス、セ、ソの子音として現れる。

[z] ザ、ゼ、ゾの子音として現れる。又「ズ」と「ヅ」の假名は、全國の大部分で同音に發音されるが、その際或る地方では、この兩者とも[z]で發音する。

[ʃ] シ及びシャ、シュ、ショの子音として現れる。

[ʒ] 「ジ」と「ヂ」、「ジャ」「ジュ」「ジョ」と「ヂャ」「ヂュ」「ヂョ」は全國的に見て同音に發音する所が多く、その際或る地方では、これらの假名をすべて[ʒ]で發音する。

[ts] ツの子音として現れる。

[dz] 「ズ」と「ヅ」の假名を同音に發音してゐる地方の中、東京その他の地方では、この兩者をいづれもこの音で發音する。又「ザ」「ゼ」「ゾ」がこの音で發音されることもある。

[tʃ] チ及びチャ、チュ、チョの子音として現れる。

[dʒ] 「ジ」と「ヂ」「ジャ」「ジュ」「ジョ」と「ヂャ」「ヂュ」「ヂョ」が同音に發音されてゐる地方の中、東京その他の地方では、これらの假名をいづれもこの子音で發音する。

[r] ラ行の子音として現れる。この音は舌のへりが上の齒に輕く著いて離れる際に生ずるものであつてその音の性質が[d]の場合に似てゐるので、前の圖に於いては便宜上[d]と同じ欄に收めた。

[ç] ヒト(人)などの語に於けるヒがこの音で發音されることがある。

[j] ヤ、ユ、ヨの子音として現れる。

〔ŋ〕ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ（カ行鼻濁音）の子音として現れる。又デンキ（電氣）サンガイ（三階）等のンもこの音である。

〔N〕ホンヤク（飜譯）ホンソウ（奔走）などに於けるンはこの音である。又ンの所で言ひ切りになつて他の音に續かない場合も、多くはこの音で發音される。この音と〔ŋ〕とは似てゐるが、〔N〕の方は後舌面が軟口蓋に密着せず、少し隙間を殘して發音される。

〔k〕カ行の子音として現れる。

〔g〕ガ行の子音として現れる。

〔h〕ハ行の子音として現れる。

三、音節の構造

國語に於いて普通に用ひられる單音の數は、母音、子音を併せて約二十七ぐらゐであり、これらの單音が結合して音節をなすのであるが、わが國の音節の構造としては、音節中に一つの母音を含むものと、母音を全く含まないものとがあり、母音を含むものには次の樣な種類がある。

（イ）一母音で出來てゐるもの　ア〔a〕イ〔i〕ウ〔u〕エ〔e〕オ〔o〕

（ロ）一子音と一母音で出來てゐるもの　カ〔ka〕シ〔ʃi〕レ〔re〕

（ハ）二子音と一母音で出來てゐるもの　キャ〔kja〕ニュ〔nju〕ピョ〔pjo〕

母音を含まずして一音節をなすものは、ラッパ（喇叭）ザッシ（雜誌）イッサイ（一切）イッタイ（一體）イッチ（一致）ガッコウ（學校）などに於ける促音の部分と、サンマイ（三枚）ハンガイ（反對）サンガイ（三階）デンワ（電話）などに於けるンの音即ち撥音の部分及び「うま」（馬）などといふ語の頭に見られるンである。しかし諸種の音節中の大部分は母音を含むもので、しかも母音で終るものであり、その中でも一子音と一母音との結合といふ構造の音節が最も多い。

又母音は元來有聲音であるが、それが無聲音に發音されることがある。東京語でキシャ（汽車）クサ（草）ツキ（月）ヒト（人）フカイ（深い）イップク（一服）等のキ・ク・ツ・ヒ・フの部分について觀察してみると、口腔の形は、普通の〔i〕〔u〕といふ母音を發する時の形をなしてゐるが、その時、聲帶は少しも振動してゐない。

師範國語要說

文部省

文部省調査普及局刊行課寄贈（第二級）

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 25, 1946)

昭和廿一年三月廿五日印刷
昭和廿一年三月廿九日發行
昭和廿一年三月三十日翻刻印刷
昭和廿一年四月五日翻刻發行

師範國語要說
定價金壹圓

著作權所有
著作者兼發行者　文部省

昭和廿一年三月三十日
文部省檢査濟

翻刻發行者
東京都神田區錦町一丁目十六番地
師範學校教科書株式會社
代表者　森下松衛

印刷者
東京都京橋區入舟町一丁目十一番地
電堂
代表者　新井修平

發行所
東京都神田區錦町一丁目十六番地
師範學校教科書株式會社